

教えて！先生 日本人形の衣裳に迫る

第7回 冠、烏帽子

松井幸生さん
株式会社善助商店社長
Matsui Yukio

金襴織物・裂地の製造卸商を営む。菅田屋勤兵衛から数えて13代目。京人形商工業協同組合副理事長。平成12年伝統的工芸品産業審議会臨時委員任命。翌年、伝統的工芸品産業の奨励賞を受賞した。

今日の先生



日本人形の衣裳にとことん迫る本企画。人形の衣裳に使われている文様や生地はもちろん、着せ方についても詳しく解説していきます。業界のスペシャリストを講師に迎え、衣裳の基礎から応用まで教えていただきます。知識の習得や再確認、セールストークにお役立てください！
第7回は男性の被り物についてです。

——今回は冠と烏帽子について調べてみました。雛飾りのお殿様が被っているものには、以前から興味があったので、女雛の髪型を学習したあとにちょうど良いテーマだと思えます。冠と聞くと、ヨーロッパの王様が被っている王冠のようなものをイメージしますが、日本のものは全く違いますね。

松井さん 西洋を中心とする外国で見られるような金、銀、銅から作られている装束品とは違って、現在の日本の冠の素材は、張貫と呼ばれる紙製の台紙に、薄い羅や紗の生地を張っています。

——張貫って何ですか？
松井さん 張貫とは木型に何枚もの和紙を貼り重ねて、ふのりで固め、表面を漆で仕上げたはりぼて

です。表面（さび）にでこぼこの柄をつけます。紙とは思えないほどの固さになります。

被り物、着用の歴史

朝廷に属する官人が着用するようになったのは、聖徳太子の冠位十二階制ができてからと考えられている。天武天皇の時代には、男子は圭冠（のちの烏帽子）と括り袴を着用することがルールとなった。やがて被り物を着用することは、成人男性の証になっていった。平安時代になると、庶民も被り物を着用するようになり、頭頂部を露出することは恥とされるようになった。

——第6回で「帽子はパンツのよう存在だった」というのはこう

した背景から来ていたのですね。

松井さん 無帽のことを露頂とって恥とする文化が生まれました。前回も少しお話しした通り、烏帽子を取られた人は、頭を抑えて隠れようとする様子が分かる絵が残っているほどです。

◆冠

冠は、宮中で公務を行うときに必ず着用しなければなりません。現在でいえばネクタイのような位置づけで、フォーマル性がある。

宮中にいる天皇は四六時中、冠を着用されていたと言われている、若くして讓位する天皇が多かったのは、冠を着用することの窮屈さを嫌っていたことが理由の一つだったかもしれないという指摘があるほど。

◆烏帽子

天武天皇の時代にルールとして定められた圭冠からスタートしたのが烏帽子。公家や、仕える人たちが日常に被る物である。

素材は平安時代までは、薄い羅で作った袋に漆をかけた、丈が高く、柔らかいものだった。それが室町時代後期頃に高さが低くなり、張貫の非常に固いバージョンへと変化していった。江戸時代になると、冠と同様に小型化していった。

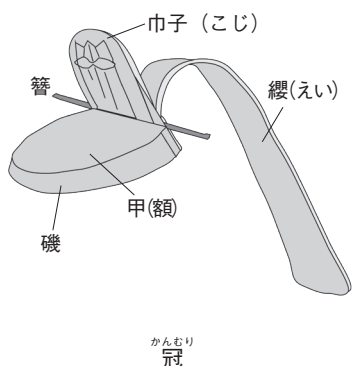
——先生、冠と烏帽子は同じものと思っていましたでしたが違ったようです。冠はフォーマルな要素が強くて公務の際に必須のもの。烏帽子は誰もが被っている日常使いされていたもの。とい

う認識で間違いありませんか？
それと、雛人形という男雛が被っているのは冠という理解は正しいでしょうか？

松井さん はい、いいと思います。見た目も異なりますから、イラストと画像でお示しした方がよいかもありませんね。

——ここから先は、烏帽子の種類などに触れたほうがよいのかもかもしれませんが、資料をサラッと見ただけでも6〜7のバリエーションがあるようで、説明しきれない可能性が……。なので次号以降で紹介するか検討させていただきます。

以前、先生との雑談の中で、冠や烏帽子の留め方について伺ったことがありました。あのお話の詳しくご紹介したいと思えます。



かんむり冠

冠、烏帽子の留め方

松井さん 雛人形の男雛を見ると顎に掛緒を結んで固定しています。が、絵巻物などの昔の様子が分かる資料を見ると、掛緒はありません。昔の人は、冠や烏帽子を被るときに掛緒を使っていなかったのです。

——紐で固定しないと、すぐに取れちゃいませんか？ 軽い素材のようだし、外出なんてとんでもないですね。昔の人はどうしていたのでしょうか。不思議です。

松井さん もしかして、何もせずに頭に載せているだけだったと思いませんか。そんなわけはありません。被り物が落ちないように、別の方法で固定していたんです。



懐中烏帽子 (画像提供: 株式会社蒼勤商店)

お殿様をイメージしていただきたのですが、髻ももぢりがありますよね。冠を被ったあと、冠と髻を繋げるように、横にした簪を、髻の真ん中あたりを挿し貫いて固定させていました(左下イラスト参照)。

右に乳の輪をつけ、紙捻かみぢりと呼ばれる和紙を細く切って擦ったものを下に垂らして、それを顎の下で結びます。

烏帽子も掛緒を付けずに被るのが本来の形でした。烏帽子の内側に小結こむすびという紐がついていて、それをやはり髻の根元に括りつけて留めていました。

「翁掛」は掛緒が完全に外にできる方法で、十文字にして紐を後ろに回す方法もありました。翁掛は年齢やTPOに応じて採用された方式で、蹴鞠のときは常にこの被り方だったと言われています。

——なるほど。冠や烏帽子が簪や紐だけで髻に固定できるのは、素材が羅や紗のように比較的軽い素材作られていたからです。

——このように勉強してみると、髪型も大きく関係してくることが分かりますね。

そうすると不思議です。なぜ私たちがお人形屋さんで見える男雛は、掛緒で被り物が固定されているのでしょうか。

松井さん 江戸時代以降は小結にとんぼという小さな棒を取り付けて髻に挿し込んで固定しました。

その後、髻がなくなり、掛緒で固定されるようになりました。

松井さん 室町時代に髪型が変わるとそれまでの結び方ができなくなり、掛緒の掛け方も変わってきます。今回は髪型含め、その辺りを解説していきます。

掛緒の掛け方は複数あります。2つの方式を紹介します。

「忍掛」は、烏帽子の内側の左

簪かんざしで髻を貫いて固定する
※イラストは中の髻が見えやすいようにしています



参考文献

- ・大原製恵子著『黒髪文化史』(築地書館株、1988年)
- ・八條忠基著『素晴らしい装束の世界』(株式会社新光社、2005年)
- ・八條忠基著『有職装束大全』(ナノ書籍印刷株、2018年)

※本連載は隔月連載です。第8回は2023年2月号に掲載します